

妊婦血液でダウン症診断

来月にも 精度99%以上

成育センターなど

妊婦の血液で胎児が染色体異常のダウン症かどうかほぼ確実に分かる新しいタイプの出生前診断を、国立成育医療研究センター（東京都世田谷区）と昭和大病院（同品川区）などが臨床研究として9月にも始めることが29日、分かった。

妊婦のおなかに針を刺す羊水検査などと違って、採血だけで容易に検査できる。また羊水検査は妊娠15〜18週で実施するのに対し、10週目以降と早期にできるのもメリット。異常が見つかれば妊娠中絶につながるが、ダウン症の人と家族でつくる日本ダウン症協会は、一般的な検査として安易に広まることへの懸念を表明した。研究には国内の数施設が参加予定で、米国の企業が開発した検査法を利用。子どもの染色体異常のリスクが高まる35歳以上の妊婦などが対象で、妊婦の血液にわずかに含まれる胎児のDNAでダウン症などの染色体異常があるかどうか、99%以上の精度で判別する。羊水検査は流産の危険があるが、この方法ではその危険はない。ただ保険は利かないため費用は21万円かかる。

盤の組織を採取する絨毛（じゅうもう）検査、妊婦の血液中のタンパク質を調べる母体血清マーカー試験などがある。羊水検査の精度は100%に近く、確定診断に使われるが、0.3%で流産の可能性がある。母体血清マーカー試験では、確率でしか異常が分ならず、厚生労働省は1999年に妊婦に勧めるべきではないとの見解を医師に通知している。

クリック

出生前診断 胎児の染色体や遺伝子などの異常を調べるため妊婦中に行う検査。超音波検査や羊水に含まれる胎児の細胞の検査、胎

盤の組織を採取する絨毛（じゅうもう）検査、妊婦の血液中のタンパク質を調べる母体血清マーカー試験などがある。羊水検査の精度は100%に近く、確定診断に使われるが、0.3%で流産の可能性

がある。母体血清マーカー試験では、確率でしか異常が分ならず、厚生労働省は1999年に妊婦に勧めるべきではないとの見解を医師に通知している。

分以上のカウンセリングの実施や継続して小児科で経過をフォローするなど、検査に当たっての基準作りを進めている。

同センターの左合治彦周産期センター長は「欧米で既に実施されている検査で、いずれ国内に入ってくることは不可避だ。営利目的の業者が介入する可能性も否定できず、専門家の管理の下で臨床研

究という形でスタートさせ、一定の歯止めになればと思った」と研究の動機を話した。同センターや昭和大病院などで出生前診断

安易な実施懸念 日本ダウン症協会の玉井邦夫理事長の話。胎児の遺伝子診断が、高精度で一般の検査と同様にできるからといって、安易に妊婦に紹介されたり実施されたりすることは強く懸念している。インフォームド

病院などで出生前診断に関わる専門医は31日、千葉県内で初会合を開き、研究計画について話し合う予定だ。

うした流れが、他の医療分野でも安易な遺伝子診断の実施につながることを強く懸念している。インフォームドコンセント（十分な説明と同意）なしに行われることがないよう、しっかりと指針を作成し、産科医療の現場で順守してほしい。

AIJ社長ら再逮捕へ

100億円詐取疑い

AIJ投資顧問による年金資産消失事件で、警視庁捜査2課が近く、複数の年金基金から約100億円をだまし取った疑いが強まったとして、詐欺容疑でAIJ社長浅川和彦被告(60)ら3人を再逮捕する方針を固めたことが29日、捜査関係者への取材で分かった。

3人はこれまで東京や横浜、長野など計6つの年金基金から計約100億円を詐取した罪で起訴されており、立件総額は計約200億円に上る。ほかに再逮捕されるのは、同社取締役高橋成子(53)、AIJの傘下証券会社社長西村秀昭(56)の両被告。捜査関係者によると、3人は2009年4月以降、投資一任契約を結んでいた複数の年金基金に虚偽の運用実績を示し、水増しした価格で投資信託などのファンドを販売。約100億円をだまし取った疑いが持たれている。